

高木兼寛の診察風景

明治二十年代は、高木兼寛にとって、脚気の研究はすでに結論がでた感じであったし、これからはいよいよ診療（東京慈恵医院）、教育（東京慈恵医院医学校）にそのエネルギーを向けようとする時期であった。彼の名声を慕って遠くから診療を乞う患者もしだいに増え、施療病院である慈恵医院だけではその診療に応じきれないこともしばしばであった。そのためこの病院とは別に、個人病院である東京病院を同二十四年に開設している。

一日のスケジュールをみても、その頃の兼寛はきわめて多忙であった。毎朝七時には東京病院に出勤し、急いで入院患者を回診し、手術をし、それがすむと、海軍省に出てその仕事をし、午後は慈恵医院で診察、回診、そのあと慈恵医院医学校で講義をする。そしてもう一度東京病院での重症患者を回診してからやっと家路につくという次第であった。現実には、その上さらに知人の往診もあり、諸種の会合もあり、学会があり、宴会もある。それにも出席せねばならない、全く昼夜寸暇なしの多忙ぶりであった。

このような中であって、いったい兼寛はどのような雰囲気で、診察、診療していたのであろうか。大いに興味があるところである。しかし、不思議というか、残念というか、そのような風景をしめす記録は意外に少ないのである。この明治二十年代の時期のものが僅かに二三残っているのみである。本稿では、その僅かな資料をとりあげながら、兼寛の医療にたいする姿勢といったものを考えてみたい。

その一つに、慈恵医院の医師・花岡三の回想である。それによると、多忙ななかにも、一人一人の患者に与える兼寛の印象はきわめて強いものであったという。

「先生（兼寛）の回診される時は、一人一人の患者の実況に照らして会話され、患者の凶星に釘を打つように、明確な好印象を与えられた。そしてその印象は生涯忘れることができないほど力強いものであった。また先生にも診断がつきにくい時は、診断がつくまで診察され、その患者のために遂に全部の回診を中止されることもしばしばであった」と述べている。

最新の医学を駆使して慎重に診察し、得られた結論を、それぞれの患者に最も適した言葉で伝えたものと思われる。病気の現状、予後について、患者が何に悩み何を望んでいるかを配慮しつつ、大げさにいうなら患者の哲学・人生観を考慮しつつ会話をしたのではないかと思うのである。だからこそ、兼寛の話が、患者にとっては凶星に釘が打たれたように、生涯の思い出になったのではないかと思うのである。

兼寛の言葉が患者に生きる勇気をあたえた具体例として、財界人・渋沢栄一の場合がある。渋沢は次のような回想文をのこしている。

「明治二十七年、面部に癌を患い悩む、とくに先生（兼寛）を煩わしたるに悪性なればとて、執刀手術を受く。多くの医師の再発を恐るる中に、先生は根治したることを声明せられしが、果たして今日に至るまで再発することなかりき。ついで同三十七年、今度は中耳炎を病み、さらに肺炎を併発す。重態なり。家人知友悉く憂い、予もまた生を望むの難きを想う。この時先生は断固として是を斥け、病気の必ず回復すべきを確言せられたり。この時も果たして快癒して今更ながら先生の明断を感謝したりき」と。つまり、高木先生に癌の手術を受けたとき、多くの医師が再発することを懸念していた中で、先生だけは再発しない、根治したと言明された。また、中耳炎と肺炎を併発して、周りの者や自分までもが今度ばかりはもう駄目だと思っていたとき、先生だけは、そんな馬鹿なことはない、絶対に治ると断言された。そしてこの二回とも先生の言が的中して、完全に治癒することができたというのである。

いうまでもないが、兼寛にしても自分の診断、治療に無欠な自信があったわけではないだろう。“人が処置し、神がこれを癒し給う (Paré)” である。絶対的な意味では自信もてる筈はない。その不安を抑えてこのように断言したのは、やはり渋沢という人物を診てのことだったのであろう。癌の手術は

丁度日清戦争の開戦直後であり、重症肺炎は日露戦争の開戦前夜であった。国家財政に深く関与していた渋沢にとっては、その何れもが最も重要であり最も生きがいのある時期であった。しかも渋沢の性格からいって、不安を与える言辭は固く彼を捉え、その後の行動に大きく影響するように思われた。兼寛はこれらを配慮しながら、渋沢にそれまで通りの生きがいを強く望んだのではないだろうか。

これらの回想とは別に、兼寛が現実に患者に向かうとき、一体どんな雰囲気かで、どんな会話をしながら診察をしていたのか、ということにも興味がある。最近、綿谷 雪編 [幕末明治実暦譚] の中に、兼寛が講談師・桃川如燕を診察する場面があったので、原文のままここに紹介する。

七、八年前（明治二十四年頃、筆者）に軍医總監の高木先生のところに参りましたが、その時に来客がございまして、如燕に講談をやれというので、人の集まりますまで先生が自分の居間へ如燕を喚んで、茶などを喫ませまして、

「如燕、どうも、いつも達者でよいナ」

「有難う存じます。おかげをもちまして、私は薬を一服飲んだことがございませぬ。少し気が閉じますと、熱爛にして二、三本も引っかかますと、それでもう快気いたします。それだけが如燕の得でございませぬ」

「それは何よりだ。だけれども、あまり年をとってから酒をたくさん飲んじゃアいかぬ。それに貴公はそればかりでない、だいぶ婦人が好きだそうだな」

「ヤ、どうも、これは御前のお言葉とも存じませぬ。好きと申すでもございませぬけれども、しかし一夜でも一人では寝にくうございませぬ」

「それがどうも困るテ、ドレ身体を診てやろうか」

「それはどうも有難う存じます。御前のお手を頂戴いたしますれば、如燕もこの上なく有り難いことに存じます。どうかよろしく御診察を願います」

と、それから高木先生こまやかに診察して下さいまして、

「如燕、貴様は珍しい身体だ。まず千人と云いたいところだが、万人にもない良い体格だ」

「ハハア、左様でございますか」

「胃も良し、肺も十分なり、殊に腸などは申し分ない。脳も良し、これといって憂うところがないナ」

「死にませぬカナ」

「冗談いっちゃいかぬ。死なぬということはない。迎えが来れば死ぬナ」

「左様でございますか」

「しかし病のために苦しむようなことはない。まず体格は申し分ない。どうも貴様は音声も出るわけだ。実にどうも膜の備えなどは至極揃っている」

「ハハア、どうも有難う存じます。わずらませぬか」

「わずらわぬ、病に倒れるようなことはない。半年寝ているの、一年わずらうのということはないから、心配いたすな」

「イエ、どうも、大医が左様仰っしゃって下さったので、如燕はすこし生き延びましたような心持ちがいたします」

「然し、念のために言うて置くが、油断をしてはいかぬ。貴公の身体は壮健に相違ない、けれども鉄のようなものだ」

「とはまた、どういうわけでございますか」

「鉄は大そう丈夫なかね(金属一筆者)のようだが、脆いからぼきりと折れるような憂いがある。如燕の身体もその通りで、大そう壮健のようだが、その代わりぼきりと折れるようなことがあるから、気をつけなければいかぬテ」と言うと、自体胆の小さい人でございますから、

「へエ、折れますカナ」

「今ではないが……」

「今折れたら大変でございます……いつごろ折れましょう」

「それはどうも、わしにもわからぬ。まず暴飲暴食をつつしんで、運動は十分しているだろうけれども、好きな酒だと申して一日のうちに二升も三升も飲むようなことがあるとよくない。それがために病いを惹き起こして、おのれの寿をおのれで詰めるようなことになる。マアマアわしの診察では、いよ

いよという時に脳溢血か何かでぽっきり逝くだろう」

これを聞いて、如燕もいそいでポッキリ折れないようにだいぶ酒もつつしんだようですが、それにしましても、大家の申されたことは間違いないもので、高木先生の仰っしゃった通り、如燕はまるで床について人事を弁じないというのはようよう一日半ばかりで、まことにどうも眠るがごとく往生いたし、実に鉄の折れるような死を遂げました（明治三十一年一筆者）。あのくらいの名医になりますと、その先のことがわかるものと見えます。今日にいたりまして、手前どももそれを考えて見ますと、ぞっとするくらいです。

兼寛と如燕の間に展開される会話と、それに同調して変化する二人の心の動きがまことに面白い。兼寛の医の原点が見えるような気がする。

いずれの話題にしる、山ほどの検査データーを前にして中々結論のでない医者にとっては、耳の痛い話である。